

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 14 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00345

研究課題名（和文）戦国武家の家門形成に果たした漢籍の役割研究-子部・集部の蒐集を中心に-

研究課題名（英文）A Study of the Role of Chinese Books in the Formation of the Warring States Warrior Clan: Focusing on the Collection of Zibu and Shubu

研究代表者

磯部 彰 (Isobe, Akira)

東北大学・東北アジア研究センター・名誉教授

研究者番号：90143841

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、戦国大名の家門形成に当時の書籍文化が深く関与していた点を、現存する蔵書と史料双方から分析した。その結果、室町幕府の衰退と運命を共にした守護大名の文芸とは性格の異なる、伏見・大坂時代のルネッサンスとも言うべき新たな文化・文芸が戦国大名によって構築されたことが明らかになった。その背景には、朝廷を頂点とする「武家精華制度」という新たな律令国家体制の下で、戦国大名に、武力とともに文化的教養が自己の身分を保持することに有益である、という意識を芽生えさせ、積極的に典籍蒐集して伝統的な宮廷貴族の文化的装いを身に付け、家門確立の一助とする政治的動向があった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、戦国時代の大名家を見る時、多くは、その戦いに視点を注ぎ、文化や学問に対して冷淡であった。戦国大名は、戦闘を通して家門を形成はしたが、武力一辺倒ではなく、すぐに文化事業にも行動を移し、漢籍・和歌写本の収取を行った。その代表は豊臣秀吉や豊臣秀次、そして徳川家康らであった。この時代の為政者は、武家にも公家のような家格を与え、新しい時代の文化の担い手として、朝廷を中心に武家精華制度により社会の再構築を企てた。この行動は、室町文化を継承し、江戸時代の新しい文化を生み出す原動力となったことを解明した点で、新たな学術的意義を見出し、武士の世の中の本質を示したことで、意義がある。

研究成果の概要（英文）：I analyze on the basis of both extant collections and historical sources the close bearings that the contemporary culture of books had on the formation of the lineages of Sengoku daimyo. As a result, it has become clear that there was created by Sengoku daimyo a new culture and new literary arts that might be described as the renaissance of the Fushimi and Osaka periods, and which differed in character from the literary arts of the shugo daimyo who shared the fate of the decline of the Muromachi shogunate. Behind this lay a political trend which, under the system of a new ritsuryo state in the form of the system of warrior regents with the imperial court at its apex, gave rise to an awareness among Sengoku daimyo that, together with military power, a cultural education might also be useful for preserving their own status and made them actively collect books and adopt the cultural accoutrements of traditional court nobles so as to help them establish their family lineages.

研究分野：東アジア文化史

 キーワード：戦国大名 伏見・大坂時代 豊臣秀吉 豊臣秀次 漢籍・和歌写本 武家精華制度 室町文化の継承  
家門形成

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

豊臣政権の成立時、徳川家や伊達家など戦国大名家は、漢籍和書を多く蒐集した。その背景には、武力で領土を拡張してきた戦国大名が、朝廷・武家閥白を中心とする武家精華制度という新たな支配秩序に組み込まれる過程で、漢籍などの典籍を蒐集し、家門形成の手段とした状況があったと推察される。

従来、戦国大名家が所蔵した宋版・五山版・朝鮮版漢籍、或は古活字本や和書などの研究は、その歴史的背景を見ることなく、書誌研究の形で行われてきた。しかし、戦国大名の典籍蒐集について見た時、それが伏見・大坂時代に集中する。この点に着目し、子部・集部漢籍を中心に、戦国大名の家門形成と典籍蒐集がいかなる関係にあり、典籍はどのようなルートで収蔵されたのか、その社会的、政治的背景には何があったのか、という視点に立つ時、典籍蒐集から伏見・大坂時代の武家社会の展開と文化形成の特色が見えるのではないかと気づくに到った。

### 2. 研究の目的

本研究は、主に漢籍蒐集という観点から、戦国末期の伏見・大坂時代、戦国大名の家門形成に果たした和漢書の持つ役割、そして蒐書された漢籍の特徴を明らかにする。具体的には、伏見大坂時代、金沢文庫本の流転に深く関与した豊臣秀次の蒐書を起点に、豊臣政権と深い関係を持ちつつも、江戸時代になると幕藩体制下での大名文化の担い手となった伊達家、上杉家、徳川將軍家と尾張家、前田家、秋田家、浅野家など、今日に蔵書を伝える戦国大名の流れをくむ大名家に焦点を当て、それぞれの家が蒐集した特徴だった子部・集部の漢籍を考証対象の中心とし、伏見・大坂時代、戦国大名の家門形成に漢籍等の典籍蒐集がいかなる役割を持ち、それらの蒐書が地域文化にいかなる影響を与えたのかを明らかにする。

東アジア出版文化において、伏見大坂時代の漢籍などの典籍の移動と所蔵、朝鮮本・朝鮮渡りの漢籍の入手、および古活字本の生成と寛永復刻本の関係については不明な点が多い。そのため、典籍文化にかかわる如上の問題を考慮しつつ、漢籍和書の蒐集が当時の社会文化形成に持つ意味を解き明かす計画にある。

本研究全体から、典籍に対する1点ごとの文献資料という従来の見方を越えて、それぞれの典籍が持つ特徴が明らかにされるとともに、蒐書による蔵書形成という総合的な視点が、書誌学や文化史研究に役立つばかりではなく、政治・社会史にも応用できる可能性を提示する。

### 3. 研究の方法

豊臣秀次の書籍蒐集を研究の出発点とし、各年度に戦国大名家の蒐書を現地調査と目録などの資料分析を併用して、以下の重点研究を中心に進めた。

#### 第1年目(平成30年度) 伏見大坂時代の戦国大名家の蔵書研究

- 1 現存本調査、及び原本書目・売立目録・古文書(書物奉行資料等)・藩校文書分析による江戸初期の大名家の蔵書の想定とその特徴の抽出
- 2 豊臣秀次の典籍蒐集と手鑑の成立
- 3 伏見・大坂時代の公家と戦国大名との関係

#### 第2年目(平成31年度・令和元年) 五山文化と戦国大名との関係研究

- 1 五山出版文化と戦国大名の関係

2 子部本草医学書・兵学・占卜書をめぐる戦国大名と軍師・僧・儒者との関係

3 五山僧の集部蘇東坡・黄庭堅・詩話等作品集の受容とその影響

第3年目(令和2年度)慶長から元和寛永期の出版交流と戦国大名との関係研究

1 伏見大坂時代の交易、戦国大名の朝鮮本・朝鮮渡り明刊本等の入手

2 集部を中心とした古活字本・覆古活字本出版と武家文化形成の関係

3 蔵書家大名の典籍移動・貸借研究(慶長から江戸後期まで)

(実際の計画では、新型コロナウイルスの流行と、新たな視点の着目、研究の進展があり、1年の研究期間延長によって、令和3年度まで研究が行われた。)

第4年度(令和3年度)

1 九州戦国大名家の漢籍蒐集の分析

2 秋田家蔵書と細川京兆家との関係の研究

3 研究全体の成果取りまとめ

#### 4. 研究成果

##### 1 戦国大名の書籍収集と伏見政権の文化政策

1) 鎌倉幕府北条氏旧蔵宋版の意味付け - 幕府政治の手本

豊臣政権下の武家精華制度に組み込まれた戦国大名家は、その出自が、三種類の家門

鎌倉幕府の御家人が各地の地頭・守護となり土着

室町幕府の守護大名や幕府奉公人

地域の小領主・土豪・野武士

のどれかに属していた。大名・小名としては、鎌倉幕府の北条氏の持っていた金沢文庫本は、武門の名誉であり、また京の公家に対応する漢籍による文化教養の保持を示すものであった。伏見時代、戦国大名家は家格を示すため、学問教養の保持を示す書籍が必要であった。豊臣政権下、戦国大名による漢籍古典籍蒐集の開始に伴い、書籍蒐集を行う中、金沢文庫本は大名蔵書の中でも特異な位置づけを持つことから、豊臣秀次が蔵書に加えた結果、武家精華制における官位の裏付けにその典籍が一定の役割を持つことになった。

2) 大坂伏見時代の朝鮮本・明刊本の蒐集

日本では、戦国末期、豊臣秀吉や徳川家康は早くから印刷文化や書籍に関心を懐き、秀吉は和歌に、家康は漢籍に注目した。ここに、文化の主権者には宋版の漢籍が武家の棟梁を代弁する飾りとなる。豊臣政権下で大名家が和書(写本)・漢籍を蒐書する中で、宋版に注目するようになる。豊臣秀吉の文禄の出兵によって、戦線有利の初期、体裁の立派な朝鮮本や両班の宋版・明刊本などが文禄の役によって将来された、と結論付けた。

##### 2 戦国大名家の家門と旧抄本

豊臣秀吉の文化政策や家格の固定化は、それまで見られなかった武人全体の教養獲得を促すものとなった。戦国大名は、室町幕府が五山の僧と結んだことに倣って、五山僧を軍師として招へいし、五山に子弟を入山させ、学問を修めさせたりもした。その背景には、豊臣秀吉の公家成(関白)と文化掌握、出版物への関心があり、豊臣秀次が関東・東北の武家ゆかりの写本や漢籍を京にもたらすと、公家も和書の写本のほか、半島よりもたらされた漢籍などに関心を持った。

#### (1) 戦国大名毛利家と書籍蒐集及び軍師安国寺惠瓊と朝鮮本

鎌倉幕府の大江広元に出自を持つ毛利家の旧抄本史記の収集、毛利氏の軍師となった安国寺惠瓊が所蔵した朝鮮本の由来とその行方、関ヶ原の戦い以後の西軍大名家の朝鮮本の没収と大名儒者への恩賞の可能性を示した。また、佐和山ものと呼ばれた石田三成の蔵書も、同じ運命をたどったのではないかと推定した。

#### (2) 上杉家の蔵書

関東管領の家柄である上杉氏の蔵書が、室町末抄本、五山版、古活字本、元明刊本、朝鮮本、宋版からなることに注目し、第1期として上杉景勝時代に旧写本や宋版、金沢文庫本、集部・詩話等作品集が蒐集されたことを示し、従来言われるような直江兼続が自身のための蒐書ではなく、主家の上杉景勝のために典籍蒐集を行ったことを導き出した。その後の収書は、第2期は五代綱憲時代の学問所(元禄10年)が出来た時、第3期は十代治憲(鷹山)時代の明和4年以降、安永5年(1776)興讓館(細井平洲)が拡張された時期と推定した。

#### (3) 戦国大名伊達家の書籍収集 漢籍を中心に

伊達家の蔵書を見ると、特殊な稀覯本は政宗時代の蒐集によるもので、和書も、伏見時代の豊臣政権との関係で手鑑類、或は、朝廷との関係で和歌書の蒐集になったと考えた。ただし、和歌書の場合、伊達忠宗、綱宗時代の蒐集、或は、吉村時代になって再び別の書籍が求められたと思われる。朝鮮本は、関ヶ原後、徳川家康が西軍に属した安国寺惠瓊などの武将から没収したものが、恩賞として与えられた可能性もあり得る。五山僧の集部蘇東坡・黄庭堅・詩話等作品集といった五山版・古活字本も京坂の出版物であるので、伏見政権下にあった伊達政宗による蒐書と結論付けた。

#### (4) 浅野家の歴史と蒐書

浅野本の特色は、子部集部の明刊本のほかに朝鮮本の古刊本・古活字本が多い点にある。中でも、禅僧三要の蔵書が含まれ、三要生前の慶長17年以前に浅野家に譲られていたとすれば、浅野幸長に、長晟の時とすれば、慶長18年の兄幸長没後で、三要の遺品として他の朝鮮本に相応すべきものとして譲られたとも考えられる。三要と浅野家との関係はよくわからないが、徳川家康に浅野長政が近侍していたことを考えれば、長政と三要が親しいこともあり得る。幸長・長晟兄弟は、藤原惺窩や門弟堀杏庵から儒学を学んでいたことから、京阪の学問社会での交流を通して、朝鮮本を含む漢籍は、和歌山藩の時には儒学書を含めてかなりまとまって所蔵されていたと見た。浅野家の蒐書の第一時期が、京阪に居ることも多かった初代浅野長政、2代目幸長及び3代目長晟の時であった可能性が高いことを示唆する。

#### (5) 羽州上山藩校明新館文庫とその漢籍

譜代大名家の収書は、明刊本が多い。庄内藩の酒井家は、徳川家譜代の大名であるが、その蔵書は明刊本や清刊本が多く、江戸の初期に明刊本を、藩校致道館が設けられたときに清刊本の四部・集部の漢籍が補充されたのであろう。これに対し、大垣の戸田家蔵書は、譜代大名ながら、宋版などを所蔵し酒井家とは異なる。その背景には、戸田家が

戦国大名から譜代大名になったことが反映する点を解明した。

上山藩松平家は、譜代大名ながら、その蔵書構成は酒井家や戸田家とは異なり、集部の明代の正徳本が最も古く、五山版集部蘇東坡・黄庭堅・詩話等作品集などは乏しく、蔵書は必要書にとどまり特徴が乏しい。これは、藩政の困窮で、蔵書を売却したことなどがあった上山松平家の事情によると推測した。

#### (6) 富山の漢籍と漢学 - 藩校広徳館とその蔵書

前田家については、富山前田家を扱った。富山藩の学問所広徳館と蔵書研究の目的と意義については、専著を公表した。(「葉の都富山の漢籍と漢学 藩校広徳館とその蔵書」) 加賀藩では、第3代前田利常が、兄前田利長蔵書を受け、將軍家御成に備えて、典籍を蒐集し、第5代前田綱紀が蔵書を拡張したが、従来言われるような、百万石の力で金沢文庫本などを蒐集したのではなく、古典籍全般の保全事業に力を注いだ、と考えた。

#### (7) 林羅山および林家旧蔵漢籍について

江戸初期以来、林羅山が所蔵した漢籍は多く、戦国大名家の蔵書に匹敵し得る。徳川將軍家に仕え、幕府の儒臣であった羅山が漢籍を所蔵したことは当然であるが、一家臣の身分にはその分を超えた蔵書であった。これは、徳川家康及び秀忠の所蔵漢籍が、林羅山に託されたことによる。徳川將軍家の蔵書について、『御文庫目録』と紅葉山文庫現存本、『御書籍来歴志』、『右文故事』によって、林家の収書を通して、伏見慶長時代の徳川家蔵書形成が明らかになった。

#### (8) 三春秋田家の蔵書とその由来

秋田家の蔵書で注目される鎌倉室町時代の和歌旧写本は、もともと室町幕府で管領家の重責を担ってきた細川京兆家の所蔵品であった。それらは、細川昭元の娘を正室にした秋田実季の時に、細川元勝から収書した可能性を明らかにした。

#### 結論

以上の各戦国大名家による典籍、漢籍蒐集の様から、次のような結論を導き出した。本研究では、豊臣政権下の伏見・大坂時代に典籍蒐集が一つの頂点に達する点に着目し、戦国大名の家門形成に書籍文化が深く関与していた点を、現存する蔵書と史料双方から実証した。結果として、戦国大名によって、守護大名家の文芸とは性格の異なる、伏見・大坂時代のルネッサンスとも言うべき新たな文化・文芸が構築されたことを示した。その背景には、朝廷を頂点とする「武家精華制度」という新たな律令国家体制の下で、戦国大名に、武力とともに文化的教養が自己の身分を保持することに有益である、という意識形成があり、積極的に典籍蒐集して公家としての文化的装いを身に着けることによって、大名家家門の確立の一助とする政治的動向があった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

|                                 |                    |
|---------------------------------|--------------------|
| 1. 著者名<br>磯部 彰                  | 4. 発行年<br>2021年    |
| 2. 出版社<br>汲古書院                  | 5. 総ページ数<br>408ページ |
| 3. 書名<br>薬の都富山の漢籍と漢学 藩校広徳館とその蔵書 |                    |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|